論　文

『和漢朗詠集』６番詩句の解釈

小 林 賢 章
同志社女子大学
表象文化学部・日本語日本文学科
特別任用教授

An explanation of passage No. 6 of “Wakanroueishu”

Takaaki Kobayashi
Department of Japanese Lanugage and Literature,
Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women’s College of Liberal Arts,
Special Appoitment Professor

一

『和漢朗詠集』６番詩句は

６　夜向残更寒磬尽　春生香火暁炉燃
夜残更に向むとして寒磬尽き　春香火に生りて暁炉燃ゆ

である。右は三木雅博訳注『和漢朗詠集』（『角川ソフィア文庫』[1]〈以下『文庫』と略称〉）からの引用であるが、振り仮名をも含めた『和漢朗詠集』本文の異同は、上句の「尽き」が「尽きぬ」となっている本がある程度で、諸本間に異同は見当たらない。ただ、江戸時代以前の『和漢朗詠集』（注釈も含めて）では、ほとんどが「尽きぬ」であり、明治以降は「尽き」であるとは言えるようだ。この箇所を「尽き」と読むか、「尽きぬ」と読むかは解釈の上では問題を生まないが、「尽きぬ」のほうがこの場面を積極的に規定することは後で述べる。

まず、現代の注釈の一般的姿を知る目的で、右『文庫』の語釈も含めて口語訳を引用する。

（冬の最後の）夜も明け方に近づき寒々とした磬の音も尽きようとしている。そして春がその火から生まれてくるように、夜明け前の香炉は赤々と燃えている。○残更――夜を初更から五更の五つに分け、その最後の五更の残された時間。夜明けが間近な時である。○向――向かおうとして。○寒磬――「磬」は石で作られた楽器。澄み切った高い音がでるが、その音を「寒」と形容し、冬の象徴とした。ここは僧侶の夜の読経の際にリズムを取るために叩かれているのであろう。○香火――仏前に焚く香の火。○暁炉――香が焚かれている炉。夜明けが近いので「暁」を冠する。▽立春前夜の山寺の光景。夜が明けると冬が終わり春になるのだ、という感慨を仏寺の景物に寄せて巧みに表現する。

以上が、その注釈部分の全体である。６番の漢詩句の解釈を明治以降の『和漢朗詠集』の注釈書に見てみると、大きな差異はない。ほぼ、この文庫の注釈の範囲に尽きている。多少の相違を一一の注釈書に当たってみるのも、論文の書き方であろうが、ここではその煩いを避けて、右注釈を現代の注釈書の代表として反論を加える形式を取る。もちろん、適宜今までの注釈書を引用する。

二

右の『和漢朗詠集』６番の詩句の解釈・注釈で、一番の問題点は、最後の▽以下で記される日付変更時点の問題である。「夜が明けると冬が終わり春になるのだ」の部分である。

平安時代、日付が変わるのは、子の刻と丑の刻の間であるという吉澤義則の主張[2]が行われてきたが、今日では、丑の刻と寅の刻の間（午前三時、以下は午前三時と呼ぶ）で定着している。日付が変わるのは午前三時であった。午前三時は真っ暗であり、「夜が明ける」のとは関係しない。

午前三時は日付の変更時点を意味するだけではなく、季節の変更もこの時点で起こる。それは、例えば、春であると、立春点を含む一日の午前三時以降が春になるのであった。

『和漢朗詠集』の古注釈を『和漢朗詠集古注釈集成』[3]に拾ってみると、次のようなことが記されている。

まず、この６番詩句は立春の部に属するのだが、その立春について、『国会図書館本　和漢朗詠注』（巻二上・鎌倉時代成立）では、「春立ト者、年ノ内ニテモ、年明テモ、春ノ立始ル日一日ヲ云也云々。」と注釈される。これは、立春点が含まれる一日すべてが立春の日であることを言っている。今日の我々の理解の仕方と同じである。立春の日の到来が季節の変わり目と一致することになる。

ただ、平安時代の立春と現代の立春をどう捉えるかには違いがあった。結論を先に述べれば、こんにち、立春の日などについて、「暦の上では」という形容句がつけられて、テレビのニュースなどで言われることが多い。「今日は立春です。暦の上では春ですが、まだまだ寒さが続きます」のようにである。ところが以下に見るように、『和漢朗詠集』の時代には、文字通り立春の日になると春であった。それも、先に述べたように、日付変更時点にいたると同時に季節も変わっていたのだった。立春の日の午前三時までは冬であり、午前三時になると春と捉える考え方であった。

次に、『広島大学本　和漢朗詠集仮名注』（巻二下・室町初期以前成立）から二カ所を引用する。それは、午前三時からが季節の変更点であった事実を述べようとするものである。

一カ所目はこの６番詩句につけられた注釈である。

此ハ、良峯ノ春道、節分ノ夜、石山ノ観音ニ参籠シテ作ル也。A謂、残更トハ、寅ノ時也。第五ノ更也。B向トハ、成ルコト也。意ハ、寅ノ時ヨリ春ニ成ルト云事也。C寒磬尽ヌトハ、寅ノ時ヨリ勤行ノカネノ音ヲ聞ケハ、鐘ノ音モ長閑ナレハ、冬ノ寒磬ハ尽ヌト也。凡、D一夜ヲ五更ニ分ル時、四更去レハ、寅ノ時也。磬トハ、打鳴ノ事也。昔シ、大唐泗浜（シヒン）ト云浦ノ石ヲ取テ、打鳴ニシケル故ニ、磬ノ字ニ、石ヲ下ニカク也。下ノ句、E香火ハ暖カナル春ヲ生スト云義也。暁炉燃トハ、暁キ、香呂ノ火ナントモモヘ、或ハ、炉ニ火ヲハヤタク体也。

（『和漢朗詠集仮名注』〈A～Eの記号及び傍線筆者。以下同じ〉）

本節で、右の記述のうち問題となるのは、Bの「向トハ、成ルコト也。意ハ、寅ノ時ヨリ春ニ成ルト云事也」の部分である。説明もいるまい。当時に於いては、寅の時からが春なのである。ただ、ここで注意しておかなければならないことは、『書陵部本　朗詠抄』（巻二下・室町初期以前成立）にも、この『和漢朗詠集仮名注』と類似の文が注釈として採用されている。全文引用する。

此ハ、良春道詩也。良峯ハルミ（チ）ト云也。石山ノ観音ニ、節分ノ夜ノ作也。江註云、方違ノ為ニ、石山ニ参タリ*ニ、後夜ニ、磬ノ音ノ聞エケルヲ、作也。丑時ヨリ春ノ分ナレハ、寒磬尽ヌト云ヘリ。寒ノ字ハ、冬ノ心也。夜ヲ五ツニ分テ、五更ト云。四更去テ、寅一点ニナレハ、残更ト云也。故ニ、冬ノ寒気ノ声モ、皆尽ヌト云ヘリ。磬トハ、打カネヲ云。是ハ本、泗浜ト云所ノ石ヲ取テ、楽器作テ、打初タリ。故、磬ノ字ニ、石ヲ随エタル也。下句ハ、春ノ気色ソツト顕テ、香煙モウラ、カニ、立春気色ヲ現スト云ヘリ。

（『書陵部本　朗詠抄』）

一読、『和漢朗詠集仮名注』と同系統の注釈本なので、注釈が類似していることがわかろう。その中で、傍線部の「丑時ヨリ春ノ分ナレハ」の部分が違っていることに気が付こう。それに、ここが、「丑」（『書陵部本　朗詠抄』）か「寅」（『和漢朗詠集仮名注』）かでは、その意味が大きく違ってくる。「丑時」なら、冒頭触れた吉澤義則の日付変更時点丑の刻説の補強資料とさえなる。

結論から述べよう。これは『書陵部本　朗詠抄』の間違いである。当該箇所の前後に、「方違ノ為ニ、石山ニ参タリ*ニ、後夜ニ、磬ノ音ノ聞エケルヲ、作也」、「夜ヲ五ツニ分テ、五更ト云。四更去テ、寅一点ニナレハ、残更ト云也」という記述が『書陵部本　朗詠抄』にあるからである。「後夜」は午前三時にならされる鐘でつげられた。「寅一点」は現在の時刻に直せば、午前三時である。類似の記述は、『和漢

朗詠集仮名注』にも「向トハ、成ルコト也。意ハ、寅ノ時ヨリ春ニ成ルト云事也。」、C「寒磬尽ヌトハ、寅ノ時ヨリ勤行ノカネノ音ヲ聞ケハ、鐘ノ音モ長閑ナレハ、冬ノ寒磬ハ尽ヌト也」と見られる。だから、ここは、「寅の刻」とあるべきだったのである。ただ、日付変更時点を調査しているとこうした問題によく出会う。寅ノ異体字「刁」の存在がこの問題には絡んでいると思われる。そしてそんなことが、日付変更時点の丑の刻説と寅の刻説の対立を引き起こす一つの原因にもなっていたのだった。

『和漢朗詠集仮名注』の他の記述にも目を向けておこう。A「謂、残更トハ、寅ノ時也。」の記述は、本節では直接関係しないが、次節、「残更」を問題にするときに意味を持ってくる。その点を述べるにとどめる。Eはこれも本節では意味を持たない。下句の解釈をするときに改めて触れたい。

次の記述は、

「夜半ヨリ前ハ、春ニテアレドモ、ハヤ暁ヨリ夏ニナル故ニ、灯ノホノヲ、嫌フ心ニテ、カベニ背ケル也。」

（『和漢朗詠集仮名注』）

である。この注は、『和漢朗詠集』の夏部「更衣」の項に掲載されている144の詩句「壁に背ける燈は宿を経たる焔を残せり　箱を開ける衣は年を隔てる香を帯びたり」（『文庫』）につけられた注釈の一部である。

右の注釈の季節の移行は春から夏への移行であることは断っておく。「夜半」の語はおそらくヤハンと読むのであろう。ほかに、ヨナカ、ヨハ等も考えられる。私には、ヤハン・ヨナカ・ヨハは同一の時間を意味する語だと考えている。いずれの語も「午後十一時から翌日の午前三時までの時間帯」を意味する。また、暁はそれに連続する時間帯「午前三時から午前五時」を意味する。『和漢朗詠集』の古注釈の中でも、454番詩句「瑶台霜満　一声之鶴涙天　巴峡秋深　五夜哀猿月叫」の「五夜」を「五夜トハ、アカツキナリ。第五更ナリ。」（『和漢朗詠集永済注』）と注釈している。「あかつき」は「五更」と同じと云っている。すでに、本稿が対象としている6番詩句でも、『和漢朗詠集仮名注』に「A謂、残更トハ、寅ノ時也。第五ノ更也。」、「D一夜ヲ五更ニ分ル時、四更去レハ、寅ノ時也。」と有ったことは紹介した。これらをあわせると暁は寅の刻と同じ意味であることが予想される。それは四更の後であり、午前三時からだった。

「夜半」が午前三時までとすると、「夜半ヨリ前ハ、春ニテアレドモ、ハヤ暁ヨリ夏ニナル故ニ」の『和漢朗詠集仮名注』の記述は季節の変更時点も午前三時であることを言っていることになる。

以上二用例から考えても、季節の変更時点は、日付の変更時点と一致するのであった。こうした事実は和歌の尽日の歌で多く見られるが、ここでは紹介を避ける。日付の変更時点は午前三時である。その立春や立夏などの日の午前三時に季節も変わるのだった。

三

次に、次節で検討する「残更」と日付変更時点を結びつける古注について言及する。古注釈書の中でも、比較的古い注釈書『和漢朗詠集私注』（巻一・平安時代末成立）、『和漢朗詠註抄』（巻一・平安時代末成立カ）などには次のような注釈が見られる。

山寺立春詩。残更者、七星指レ尾不同也。正月者、戌時指寅方一。二月者、戌時指卯方一。三月者、戌時指辰方一。四月者、戌時指巳方。五月者、戌時指午方。之時夜将明。故五更也。後之月准　而可之。寒磬者、寒、冬気也。磬者、仏具也。冬去春来、故寒磬尽一也。香火者、仏前焼レ香之火也。春気暖　故曰生　香火也。言、磬香炉顕山寺一之内也。

（『和漢朗詠集私注』）

良峯春道、年護参詣近江国石山寺言也。彼山寺観音験所也。残更、内典、一夜六時分也。外典　五更別也。近来外　六時云歟。而七星指　尾一不同也。正月戌時　七星尾寅方一。二月戌時　指卯方一。乃至後々月准之。正月指寅方二云一更一。乃至指午方一、夜将明一之時云五更一也。後々可知之一。第五更云残更一。敦隆説也。夜分五一是謂五更一也。更（夜讖也。又替云也。）寒磬者、寒、冬気也。磬、仏具也。冬去春来、故曰寒磬尽　也。香火者、仏前焼香之火也。春気暖　故曰生　香火一也。言、磬、香炉、顕山寺之由也。前、向、弘決三云、以小遠者一為前一、以稍近者一為向一文。

（『和漢朗詠註抄』）

右の注釈の傍線部分を問題とする。ただ、『和漢朗詠集私注』の「之時夜将明。故五更也。」には、「底本のまま。「正月指午方」脱。」の脚注がつけられている。底本以外の諸本に「正月指午方」が含まれているものがあって、その方が意味が通じ

ると編者が考えたからであろう。また『和漢朗詠註抄』では、当該部分、「正月指寅方二云一更。乃至指午方一、夜将明一之時云五更一也」とある。『和漢朗詠集私注』の本文にも「正月」という語がないと意味が通じないから、本稿では、この部分を、「正月指午方之時夜将明。故五更也。」が本文であると考えて、以下引用する。

そもそも、この部分はどうしてここに書き加えられたのであろう。「残更者、七星指レ尾不同也。」（『和漢朗詠集私注』）、「残更、内典、一夜六時分也。外典、五更別也。近来外、六時云歟。」（『和漢朗詠註抄』）とそれぞれの段落の頭に、「残更」という詞があるから、残更に加えられた注釈であることがわかろう。

残更そのものは後に検討するので、ここでは、それぞれの、

正月者、戌時指寅方。二月者、戌時指卯方。三月者、戌時指辰方。四月者、戌時指巳方。五月指、戌時指午方。正月指午方之時夜将明。故五更也。

（『和漢朗詠集私注』）

而七星指尾一不同也。正月戌時　七星尾指寅方。二月戌時　指卯方。乃至後々月准之。正月指寅方二云一更。乃至指午方一、夜将明一之時云五更一也。後々可知之。第五更云残更。

（『和漢朗詠註抄』）

箇所に注目する。それも、『和漢朗詠集私注』の、「正月者、戌時指寅方。」と「正月指午方之時夜将明。故五更也。」の部分と『和漢朗詠註抄』の「正月戌時　七星尾指寅方。」と「正月指寅方二云一更。乃至指午方一、夜将明一之時云五更一也。」の部分である。

北斗七星の柄の部分が午後七時（「戌の刻」）に寅の方角を指すとその月が正月である。とそれぞれの前半注で言っている。ただ、これは太陽暦に基づくので当時の太陰暦の暦に直接は対応しないことは断っておかなければならない。

ただ、「正月者、戌時指寅方。」や「正月戌時　七星尾指寅方。」が午後七時に成り立ったと仮定すると、「正月指午方之時」や「至指午方一」の時、北斗七星の柄が午の方向を指す時間は、戌の刻から、八時間たっていることがわかる。午前三時である。その時刻が、「夜将明。故五更也。」、「夜将明一之時云五更一也。」と言っていることになる。「夜の明く」時刻は平安時代などの古典作品を読むときは午前三時を意味することは、何度も指摘してきた。ここはその補強となる。それにその時間が「五更」であるとも述べていることになる。もちろん正確に言うと、「五更」の始まりが午前三時であった。次節で、詳しく述べるが、「残更」は五更と同じ時間帯を意味し、その開始時刻は午前三時だった。北斗七星の柄が指す方向の記述が出てきたのは、残更の時間帯との対比を述べようとしたのだった。

四

本節以降、『和漢朗詠集』６番詩句の『文庫』で行われている注釈に問題があることを順次指摘していく。そのために一つの古注を引いておく。『和漢朗詠集註』[4]（江戸初期成立）である。『和漢朗詠集註』は漢詩部分に鎌倉時代につけられた永済注に、北村季吟が和歌注を加えて、江戸初期寛文年中に刊行されたものである。季吟は『永済注』を引用する際多く手を加えたことが知られており、『永済注』として漢詩部分を引用するのは不適切とされる。本稿では６番詩句の注釈がどの時代に変更されたのかを見ていきたいので、あえて、『和漢朗詠集註』から引用する。江戸時代の『和漢朗詠集』注釈の様子を見ておきたいからである。ただ、ここに引用する注釈部分では、表記を別にすると、例えば、『書陵部本　永済注』と『和漢朗詠集註』の両注釈に差異はない。

残更を検討する。ただ、残更については、前節で、夜半と暁との検討の中で私の主張を大概述べてきた。ただ、今日の注釈にいたるどの時代で間違いが起こったかを知りたいので、ここでもう一度『和漢朗詠集註』の注釈を通して検討する。

此ハ良峯春道ガ年ゴモリニ。近江国石山ニ詣テ作レルナリ。彼石山ハ観音ノ験所也。
A残更トハ暁也。内典ニハ昼夜ヲ六ニワカチテ。六時ト云。外典ニハ一夜ヲ五ニ分テ五更ト云。シカレバ其第五更ヲ残更トハ云ナリ。

（『和漢朗詠集註』）

「残更トハ暁也。」「外典ニハ一夜ヲ五ニ分テ五更ト云。」「第五更ヲ残更トハ云ナリ。」の三つの要点が指摘できる。

a「残更トハ暁也。」から、「残更」が「暁」である。

b「外典ニハ一夜ヲ五ニ分テ五更ト云。」だけではわかりにくいので、『朗詠註』から次の類似の注釈を引用する。213の詩句中の「五夜（『文庫』では「五更」の本文を採用していて、213番詩句中には「五夜」の語はない）」につけられた

「五夜ハ五更ナリ暁ナリ。五更ハ戌時ヨリ寅時マデヲ五更ト云也。」である。

「五更」が「暁」であり、「五更」は「寅時」であることがわかる。

c「第五更ヲ残更トハ云ナリ。」からは「五更」が「残更」であることがわかる。

「残更」は「寅の時」であり、「暁」であった。

江戸時代の注釈書をもう一つ引用しておく。『和漢朗詠集諺解』(5)（江戸初期成立）である。

近江州石山ニ詣デ、年ゴモリノ夜ノ作也。春道ハ惟良氏也仁明天皇承和ノ人也。遊逸ノ人ニテ詩歌ニ妙ナル人也。元亨釈書二十八ニ石山寺ノ事アリ。余考フルニ孝謙天皇天平勝宝六年之草創也。其後聖武帝ノ御宇ニ良弁上人作テ丈六観音蔵ニ納ニ初御仏於今仏像ニ自在霊応之地也。○三更 更 夜更 コレ万葉ノ点ナリ。然バ残更ハ暁也。○磬ハ順ガ和名ニ宇知奈良之、僧清間題レ寺詩曰「五色雲中鳴ニ玉磬ニ」ト作リタリ。一ノ句、年コモリノ夜ナレハ、残更ノ時分ニ向〳〵トシテ、冬ノ寒気ヲ帯タル磬ノ響ハ、春ノ気ニ推レテ寒磬尽ヌルト也。春ハ目前ノ香炉ノモユル上ニホノ〳〵ト生シ来ルト也。立春ノ心ナルホト著明也。

（『和漢朗詠集諺解』）

右の注釈の内、傍線部「○三更 更 夜更 コレ万葉ノ点ナリ。」の「更」を問題にする。ところが、これは、「五更」の間違いであることを述べねばならない。

2213 このころの 五更露尓（あかときつゆに） 我がやどの 秋の萩原 色付きにけり

（『万葉集』）

3061 五更之（あかときの） 目覚まし種と 見つついまして 我を偲はせ

（『万葉集』）

など、『万葉集』中には「五更」をアカツキ（現代では「アカトキ」と付訓される）と読ませる用例はあるが、「更」をアカツキと読ませる用例はないからである。また、当該部分の頭注に、「残更ハ第五更也」とあることも「更」は「五更」の間違いであることを示していると思われる。

残更について、『文庫』では「夜を初更から五更の五つに分け、その最後の五更の残された時間。」とあった。五更の一部の時間が残更という解釈である。一方、『和漢朗詠集註』と『和漢朗詠集諺解』には残更について次のように述べていた。

「残更トハ暁也。」「五夜ハ五更ナリ暁ナリ。」

（『和漢朗詠集註』）

「三更 （五）更 夜更 コレ万葉ノ点ナリ。然バ残更ハ暁也。」

（『和漢朗詠集諺解』）

五更つまり午前三時から五時が五更であり、五更そのものが残更という主張である。明治以降の近代の注釈では、『文庫』につながる主張が強くなり、江戸時代以前の古注とはここで異なってくる。ただ、近代の注の中にも、『和漢朗詠集新釈』(6)では「一夜を分ちて、五更と為す。一更を甲夜といふ。戌時（今午後八時）なり。二更を乙夜と云ふ。亥（今午後十時）なり。三更を丙夜といふ子時（今の午後十二時）なり。四更を丁夜といふ、丑時（今午前二時）なり。五更を戊夜と云ふ、寅時（今午前四時）なり。残更は、即ち五更を云ふ。向は、和訓栞「なん〳〵とす」の條に、「垂字、向字などをよめり。成なんとするの義なり。しにかゝるを垂死とし、くれかゝるを、向暮といふの類にて推べし」と見ゆるが如し。」と江戸時代以前通じる主張を述べている。

この注釈はほぼ正しいのだが、現代の時間との対応例えば、「一更を甲夜といふ。戌時（今午後八時）なり。」の午後八時は、今日では午後七時とするのが妥当とされており、残りの時間も一時間ずつ繰り上がることは述べておかなければならない。つまり、残更は午前三時から午前五時の間であった。『新釈』はもう一つ大切なことを述べていた。

「向残更」は残更になりかかる意味だと言っている。

さらに『朗詠註』の記述とあわせると、「午前三時から午前五時までが残更であり、暁でもあったのである。それに「向ん」の意味をあわせると、「午前三時になろうとする」という意味になるのである。

「一夜ヲ五更ニ分ル時、四更去レハ、寅ノ時也。」

（『和漢朗詠集仮名注』）

「夜ヲ五ツニ分テ、五更ト云。四更去テ、寅一点ニナレハ、残更ト云也。」
（『書陵部本　朗詠抄』）

これらの記述は一見、残更の説明をしているようだが、「向残更」の「向」も含めて説明をしているのだった。

中世の諸注、その影響を受けて成立した江戸時代の注釈書は、「向残更」を午前三時のこと捉えていた。近代の注でも、残更を午前三時から五時と捉えるとらえ方は、『新釈』などで生きていたが、「向残更」の時点が午前三時ということは、近代に入って用いられなくなったようである。というより、「残更は夜を五更に分ち、其の最後の更の将に終らんとして未だ尽きざる時をいふ。」（『和漢朗詠集考證』）の解釈は残更の解釈を間違えているのであった。『文庫』の注釈もこの『和漢朗詠集考證』の理解につながるのだった。日付変更時点やアカツキの意味が分からなくなったころに、この6番の詩句の解釈も無明の闇に入っていたのだった。

五

次に**寒磬尽**を検討する。『文庫』では「○寒磬――「磬」は石で作られた楽器。澄み切った高い音がでるが、その音を「寒」と形容し、冬の象徴とした。ここは僧侶の夜の読経の際にリズムを取るためにたたかれているのであろう。」とあった。『朗詠註』（漢詩注部分は鎌倉時代成立の永済注）には「B寒磬トハ冬ノサムキ音ヲ帯セル故ニ寒磬ト云也。春ニ成ヌレバ冬ノ磬ハツキヌト云ナリ。」との記述があった。『書陵部本　朗詠抄』（巻二下・室町初期以前成立）では、「磬ノ音ノ聞エケルヲ、作也。丑時（実は「寅」の間違い）ヨリ春ノ分ナレハ、寒磬尽ヌト云ヘリ。寒ノ字ハ、冬ノ心也。」と述べる。

前節で、「残更に向むとして」が午前三時の時点を示していることを述べた。午前三時以降は暁である。午前三時から後夜の行が行われる。後夜の行の開始を知らせる磬の音は暁の到来を知らせる鐘であり、「暁の鐘」と呼ばれるものである。その事実を右の注釈は述べていたのである。『文庫』の「ここは僧侶の夜の読経の際にリズムを取るために叩かれているのであろう。」の記述は、ここでは該当しない。

さらに、右引用の二注釈書に加え、『和漢朗詠集私注』（巻一・平安時代末成立）、『和漢朗詠註抄』（巻一・平安時代末成立カ）の注釈も加える。ただ、「寒磬」についての注はほぼ同じなので、引用は、『和漢朗詠集私注』の注釈にとどめる。

寒磬者、寒、冬気也。磬者、仏具也。冬去春来、故寒磬尽也。香火者、仏前焼レ香之火也。春気暖、故曰生香火也。
（『和漢朗詠集私注』）

これら四つの注釈の共通項は「寒」は冬と結びついていることである。『文庫』の「冬の象徴とした。」は、午前三時は日付変更時点であるとともに、季節の変わり目でもあることに注意しないと理解できない。

『和漢朗詠集』の6番の詩句は、春の部のそれも立春の項に所属していた。『文庫』は「澄み切った高い音がでるが、その音を「寒」と形容し、冬の象徴とした。」としているが、その音が冬を象徴していると言っているが、そうではなく季節が冬だから「寒磬」と言っているのだった。

『文庫』は「▽立春前夜の山寺の光景。夜が明けると冬が終わり春になるのだ、という感慨を仏寺の景物に寄せて巧みに表現する。」と述べていたが、こうした解釈ではこの詩句は、立春の前日のことになってしまって、部立ての立春の日が詠まれていないことになる。

「寒磬尽」は冬の終わることを言っていた。「暁の鐘は冬が去ることを告げて響いた」というのが私解である。

そう理解するためには、「寒磬尽き」「寒磬尽きぬ」のほうがよいと考える。もちろん、助動詞ヌが入らなくても、「寒磬が尽きた」と解釈できないわけではない。ただ、江戸時代以前の『和漢朗詠集』には「尽ヌ」と書かれている本が多いことは述べておく。当該詩句の意味が失われていく過程で、『和漢朗詠集』本文も「尽きぬ」から「尽き」に替わっていったように思われる。

六

最後に、下句「春生香火暁炉燃」について述べる。『文庫』は、「そして春がその火から生まれてくるように、夜明け前の香炉は赤々と燃えている。」と述べている。

E香火ハ暖カナル春ヲ生スト云義也。暁炉燃トハ、暁キ、香呂ノ火ナントモモヘ、或ハ、炉ニ火ヲハヤタク体也。
（『和漢朗詠集仮名注』）

春ハ目前ノ香炉ノモユル上ニホノ〴〵ト生シ来ルト也。立春ノ心ナルホト著明也。

（『和漢朗詠集諺解』）

などの注釈を見ると、『文庫』の解釈はほぼ正しいことが分かる。ただ、どうして、「春がその火から生まれてくるように」思われるのかは今まで述べてきたことにより、正しくはない。春になったから、「暁炉」は生き生きと燃えていたのだった。

午前三時になると春なのであった。そのことを理解していないと、この6番詩句は解釈ができないのだった。午前三時になると、「暁」でもあった。後夜の行に点される炉は、「暁炉」であることになる。

午前三時までが冬で、午前三時以降が春であることは、午前三時が日付変更時点であった事実を認めないと理解不可能だった。明治以降の『和漢朗詠集』の注釈では、日付変更時点が午前三時であったという事実が失われてしまった。そのことがこの6番詩句の誤解釈の発生にかかわっていたのであった。

注

（1）三木雅博訳注『和漢朗詠集』（『角川ソフィア文庫』二〇一三年 角川学芸出版刊）

（2）吉澤義則「「アカツキ」・「シノノメ」・「アケボノ」」（『増補 源語釈泉』一九七三年 臨川書店刊）

（3）伊東正義・黒田彰・三木雅博編著『和漢朗詠集古注釈集成』（一九八九年～一九九七年 大学堂書店刊）

（4）寛文十一年刊。架蔵本。

（5）元禄五年刊。同志社女子大学蔵本。

（6）金子元臣・江見清風著『和漢朗詠集新釋』（一九一〇年 明治書院刊）

（7）柿村重松著『和漢朗詠集考證』（一九七三年 藝林社刊）。復刻版による。